

主 題：あなたは本当に救われていますか？ 1

聖書箇所：マタイの福音書 7章13－14節

今回、皆さんとごいっしょに学んで行きたい箇所はイエスが語られたメッセージ「山上の垂訓」のクライマックス部分です。このマタイ7：13以降でイエスは、「本当の信仰と偽りの信仰」について教えています。というのは、実は、この当時には「自分は救われている！私は神から及第点をいただいている！だから、天国に行くことができるのだ！」とと思っているが、実際には救われていない律法学者やパリサイ人たち、また、多くのユダヤ人たちがいたからです。皆さんはいかがでしょう？あなたは本当に救われていますか？「私は大丈夫！私は絶対に救われている！神さまの教えである聖書をしっかりと理解し、どうすれば救いを得ることができるのかよく分かっているし、間違いなく私は救われている！」と、そのように言い切ることができますか？

☆イエスが教えられた救いの方法とは？

今日、多くのキリスト教会では、実に簡単に「だれでも救われることができる」というメッセージを発信しているように見受けられます。確かに、イエス・キリストを信じるならだれでも救われます。その教えは真実です。実際、聖書はそのように教えています。でも、特に、今日の箇所以降のみことばを学んで行くと「もしかすると、救いとは今まで自分が思っていたほどそんなに簡単なものではないのかもしれない…」と、そのように考え直される方がいるかも知れません。しかし、それは大変重大なことです。ですから、皆さん、どうぞしっかりみことばを学んでください。この牧師がこう教えていたからとか、自分はこう理解して救われたはずだとか、自分はこう考えるからとかではなく、みことばがどのように教えているのか、そのことだけに注目して「救いとはどのようにして得ることができるのか？」と、そのことをしっかりと学び理解して、それをご自分のものとしてください。今回からしばらく、間隔はかなり開くと思いますが、イエスが教えられた救いの方法について、ごいっしょに学んで行きたいと思います。

1. あなた自身が自分で選択しなければいけない 13節

まず初めに私たちが注目したいことは、「信仰とは個人の選択である」ということです。あなたが救われるためには、あなた自身が自分で選択する必要があります。そのことを見て行きましょう。13節「狭い門からはいりなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこらはいって行く者が多いのです。」、ここでは「狭い門からはいりなさい。」と命じられているだけで、具体的に「どこにはいるのか」ということに関しては話されていません。しかし、イエスがここでも「天の御国」に関する話をされているということは、ここまでイエスのメッセージを真剣に聞いているなら、そのことはだれの目にも明らかなことです。事実、ここで「はいりなさい。」と訳されていることばは、この山上の垂訓のメッセージでは5回使われていて、その内2回は7：13で使われています。他の3回を見ると、(1)マタイ5：20「まことに、あなたがたに告げます。もしあなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら、あなたがたは決して天の御国に、はいれません。」、ここでイエスが話されたことばは、間違いなくこのメッセージを聴いた者たちに大きなショックを与えたはずで、「律法学者やパリサイ人たちがさえ救われぬというのなら、いったいだれが救われるのだろうか？」と。次の箇所は祈りに関してイエスが教えられた箇所、「はいりなさい」ということばに関しては、先ほどの箇所に比べるとそれほどインパクト、強い印象はありません。(2)マタイ6：6「あなたは、祈るときには自分の奥まった部屋にはいりなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。」、そして、今日の箇所マタイ7：13ですが、ここでは2回使われています。最後の箇所は(3)マタイ7：21「わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。」と、ここでも「はいりなさい」ということが「天の御国にはいる」、つまりは、天国に行く、救われるということの意味しているのです。また、それだけではありません。このマタイ7：13と7：21とは同じ話の流れにあるので、それらが全く違うことを話しているとは考えられません。このように、このマタイ7：13で話されていることが「天の御国にはいること」、すなわち、救いに関することだと、皆さんもご理解いただけると思います。

そこで注目したいのが、この「狭い門からはいりなさい。」ということばの表現です。ここでは「はいりなさい」という動詞が命令形で使われています。しかも、その命令形の中のアオリスト、つまり、日本

語では「不定過去」と言われる時制で、「はいりなさい」と命じられているのです。このアオリスト命令法は緊急を要する場合に使われる命令形で、「今、はいりなさい！直ちにはいりなさい！」という意味です。それまでは違ったことをしていた者たちに対して、ここでは、広い道を歩んでいる者たちに対して「今すぐ、狭い門からはいりなさい！」と教えられているのです。実は、この命令からこのようなことが分かるのです。

◎この命令が教えていること

(1) 生まれながらの人間は広い方の道を歩いている

まず第1に、生まれながらの人間は広い方の道を歩いているということですが、また後でも見ますが、確かに、私たちには数多くの選択というものがあります。しかし、私たちのたましいの分野においてみことばが教えることは、人間が歩くことのできる道は二つしかないということです。しかも、多くの人は、実は、すべての人間は、生まれながらに広い方の道を歩んでしまっており「滅びに至る門」に向かって進んでいるというのです。ですから、エペソ2：1-3でもパウロは、救われる前のクリスチャンたちのことをこのように表現しています。「あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、**：2** そのころは、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従つて、歩んでいました。**：3** 私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあつて、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」と、このようにみことばは私たち人間がすべて、かつては罪の故に死んでいたことと、この世の流れに流されてしまつて、生まれながらに神の御怒りを受けるべき存在であつたことを教えています。だから、イエスもヨハネ3章で、救いについて訪ねて来たニコデモに対してこのように言われたのです。ヨハネ3：3-5「**：3** イエスは答えて言われた。『まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。』**：4** ニコデモは言った。『人は、老年になつていて、どのようにして生まれることができるのですか。もう一度、母の胎にはいつて生まれることができますでしょうか。』**：5** イエスは答へられた。『まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によつて生まれなければ、神の国にはいることはできません。』」。ここでイエスが教えてくださったように、私たちが救われて天に行くためには、新しく生まれ変わる必要があるのです。生まれて来たままで、大きく変えられることなく、少しばかり生き方や考え方が変わった程度では、決して人は救われ得ないのです。

箴言14：12と16：25にはこのように書かれています。「人の目にはまっすぐに見える道がある。その道の終わりは死の道である。」と。残念ながら、私たち人間には永遠の滅びに至る道の方が、「まっすぐに見える」ことがあるのです。しかも、多くの人がその道の側に進んで行ってしまうので、余計に安心してしまうのです。しかし、私たちはどちらが正しい道なのか、どちらが神の祝福に繋がっているのかということをしつかりと吟味しなければいけないのです。

(2) この選択(=命令)はすべての者に対して与えられている

もう少し、この「狭い門からはいりなさい。」という命令を観察してみましょう。この選択、これを命令と言い換えても良いと思いますが、これはすべての者に対して与えられているのです。なぜ、そのように言えるのか、ここには一切の条件が記されていないからです。この命令を聞いたすべての者にこの選択が与えられているからです。つまり、今のまま滅びに至ってしまう広い道を歩き続けるか、あるいは、今からイエスの言われる狭い門からはいつて行くか、どちらかの選択です。残念ながら、この当時のユダヤ人たちは「救いは自分たちユダヤ人のものである！」と考えていました。ですから、マタイ5：43にもあるように「自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め。」というようなことを平然と教えていたのです。「自分の隣人」とは自分たちユダヤ人のことで、「自分の敵」とはそれ以外の人たち、すなわち、異邦人たちや、同じユダヤ人ではあつても取税人や罪人たちのことで、そのような「敵」に対しては、積極的に伝道して彼らが救われることなど期待しなかつたのです。

しかし、イエスは違いました。ヨハネ4章を見ると、ユダヤ人たちが毛嫌いしていたサマリヤ人に対してもイエスは伝道しておられます。マタイ15章ではカナン人に対して、マタイ8章ではローマ兵に対しても、イエスは愛を實踐し、救いの道を宣べ伝えられました。ですから、イエスは昇天されるとき、マタイ28：19-20で弟子たちに何と命じられましたか？「**：19** それゆゑ、あなたがたは行つて、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によつてバプテスマを授け、**：20** また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るようによつて、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」と、このようなイエスの命令の故に、キリスト教は筆舌に尽くし難いような迫害を受けても、数限りない殉教者が出て、この救いのメッセージを文字通り全世界に宣べ伝えて行つたのです。皆さん、この選択、つまり、このまま広い道を歩き続ける

か、あるいは、イエスの教える狭い門を通るかというこの選択は、これを聞くすべての者に与えられているのです。

(3) 選択とは二者択一である

三つ目に、しかもその選択は「二者択一」だということです。そのまま広い道を歩き続けるか、それとも、狭い門を通して狭い方の道に移るか、選択はそのどちらかです。それ以外の第3の選択はないのです。あなたはそのどちらかを今選ばなければいけないし、今、もう既に選んでいるのです。正直、私たちクリスチャンがこのような選択を迫ると、ある方は「難しいからまた今度決めます」と言われる方がいます。確かに、そのように躊躇する気持ちは分かります。私自身も初めて信仰をもつか否か迫られた時、「今まで自分が形成した価値観や考え方を変えて、この神を信じなさいと言われても、急には無理です！」と返答しました。しかし、いつであっても同じなのです。価値観を変える、生き方を変えるというのは、いつであっても勇気が要るものです。万端な用意などというものはほとんど存在しないのです。皆さん、あなたは今も、このどちらかの選択をしているのです。「どちらか決めかねている…」のではないのです。もし、あなたがこの「狭い門からはいる」という決心をしていないなら、それは「広い方の道を歩み続ける」という選択をしているということなのです。

(4) そして、その選択はあなた自身がしなければいけない

最後に、イエスが迫られているこの選択は必ずあなた自身がしなければいけないということです。残念ながら、この選択をあなたに代わって、だれか別の人が選択することはできません。これは神があなた個人に対して与えられた選択なのです。イエスはこの選択をこのメッセージを聴いた個人個人に対して問われました。あなたに関しては、あなた自身がこの選択をしなければいけないのです。だれかがあなたに代わって選択することもできないし、あなたがだれかに代わって選択することもできない、極めて個人的なものなのです。実は、このことは、当時、ユダヤ人たちが「自分たちはアブラハムの子孫であるから救われて当然だ！」と信じていたということを考えるなら、驚くべきことなのです。皆さん、ルカ3：7-9をご覧ください。「**7** **それで、ヨハネは、彼からバプテスマを受けようとして出て来た群衆に言った。「まむしのすえたち。だれが必ず来る御怒りをのがれるように教えたのか。8** **それならそれで、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。『われわれの先祖はアブラハムだ。』などと心の中で言い始めてはいけません。よく言うておくと、神は、こんな石ころからでも、アブラハムの子孫を起すことがおできになるのです。9** **斧もすでに木の根元に置かれています。だから、良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。」**、アブラハムの故に、自分たちはアブラハムの子孫であるから、当然、自分たちは天に行けると考えていたユダヤ人たちのことが語られています。アブラハムの子孫など、神はその辺に転がっている石ころからでもお造りになることができるのです。「そのようなことに安住するのではなく、しっかり自分の罪を悔い改めて、それにふさわしい実を結びなさい」とバプテスマのヨハネは教えるのです。

皆さん、特に、クリスチャンホームに育った皆さん、聖書の教える信仰とは個人的なものです。たとえ、あなたがクリスチャンホームで生まれ育ってしようと、どれほど多くの聖書の話やみことばを覚えていようと、また、信仰告白をしてバプテスマを受けていようと、それらがあなたを救うのではありません。あなたを救うのは、あなた自身が本物の信仰をもっているかどうかです。あなたの家族ではありません。クリスチャンホームで育った多くの子どもたちは言います。「自分はいつ信じたか分からない」と。また、ある子どもは「自分が信じているかどうかさえ分からない」と。確かに、そうかもしれません。でも、問題はいつ信じたかなどということではありません。あなたが神を信じて、その神に従う決心を今しているかどうかです。「**狭い門からはいる**」という決心を今あなたがしているかどうかなのです。また、クリスチャンホームで両親の立場である皆さん、残念ながら、聖書はあなたが子どもに代わって信仰をもつことができるとは教えていません。あなたの子どもが救われるかどうかは、ある意味、あなたの責任ではなく、その子ども自身の選択であり責任なのです。私たちの責任は神のことを正しく伝えて行くということはもちろんですが、そこには選択があるということ、そして、その選択は自分自身がしなければいけない、ということ伝えて行くことなのです。当然、そこには自分の下した選択に応じて責任が伴います。神もそれと同じことをアダムとエバに対してされました。神はアダムに対して、してはならないことをはっきり教えられました。「**あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。**」(創世記2：16-17)と。そして、その命令に背いた時の罰も明確に語られました。「**それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ。**」(創世記2：17)と。これは「**選択と責任**」です。このように教えながら、神はアダムやエバに代わって選択されませんでした。選択をしたのはアダムでありエバなのです。また、それだけではありません。神がイスラエルの民に対して何度も語られた内容もそうでした。神に

従うなら祝福が、しかし、そうでないなら呪いが与えられると。

もしかすると、私たちは子どもたちに代わって何かを既に選択してしまっていないでしょうか？本来なら、子どもが自分で考え、自分で選択し、自分で行動し、自分で責任を取らなければいけないのに、親である私たちが子どものしたことの後始末をしてしまっているなどということはないでしょうか？「あなたはクリスチャンなのだからこのようにしなければいけない。これが最善の道ですよ！」と。これは見方を変えるなら、強制的に神に捧げ物をさせているような、行ないだけを要求してしまっていることにはならないでしょうか？もし、そうなら、子どもたちはますます反抗し、親に話さなくなるのではないのでしょうか？確かに、子どもが小さい頃は親が選択し、親が決めてあげるべきです。しかし、あくまでも目標は、子どもが自分で正しい選択をして、自分自身で責任を取って行くことです。それを目標に、子どもたちが小さい頃から私たち親はそのことを意識して教えて行かなければいけないのです。

2. 救いに至る道は唯一である 13-14節

次のポイントに移りましょう。イエスの教えてくださった救いの方法、その2番目、それは救いに至る道は唯一である、つまり、たった一つしかないということです。「**13 狭い門からはいりなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこからは行って行く者が多いのです。14 いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。**」、イエスは、ここで「狭い門からはいりなさい」と言われました。ここで「狭い」と訳されていることばは「狭い」という意味の他に「窮屈な、厳格な」というような意味もあることばで、新約聖書ではこの箇所他にはルカ13:24で使われているだけです。皆さん、ルカ13:23-28をご覧ください。「**23 すると、『主よ。救われる者は少ないのですか。』**と言う人があった。イエスは、人々に言われた。**24 『努力して狭い門からはいりなさい。なぜなら、あなたがたに言いますが、はいろうとしても、はいれなくなる人が多いのですから。25 家の主人が、立ち上がって、戸をしめてしまってからでは、外に立って、『ご主人さま。あけてください。』と言って、戸をいくらたたいても、もう主人は、『あなたがたがどこの者か、私は知らない。』と答えるでしょう。26 すると、あなたがたは、こう言い始めるでしょう。『私たちは、ごいっしょに、食べたり飲んだりいたしましたし、私たちの大通りで教えていただきました。』 27 だが、主人はこう言うでしょう。『私はあなたがたがどこの者か知りません。不正を行なう者たち。みな出て行きなさい。』 28 神の国にアブラハムやイサクやヤコブや、すべての預言者たちがはいつているのに、あなたがたは外に投げ出されることになったとき、そこで泣き叫んだり、歯ぎしりしたりするのです。』」、いかがでしょうか？初めに言ったとおり「だれでも簡単に救われる」という印象とは違った感じを受けませんか？この24節では「努力して」とありますが、このことばは、競技者が苦しいまでの努力をして勝利を得ようとしている姿を表現するときに使われることばです。つまり、救われるために努力が必要な場合もあるのです。たとえば、皆さんは救われるために何か努力をされましたか？いわゆる「救われるために良いことをしよう！」というような努力のことではありません。救いに関して間違った理解をもつことがないように、しっかり考えましたか？また、誤りのない真理を探求するために、いろいろな質問をしたり、教会に通ったりされましたか？Iコリント15:1-2ではこのように教えられています。「**1 兄弟たち。私は今、あなたがたに福音を知らせましょう。これは、私があなたがたに宣べ伝えたもので、あなたがたが受け入れ、また、それによって立っている福音です。2 また、もしあなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら、私の宣べ伝えたこの福音のことばをしっかりと保っていれば、この福音によって救われるのです。**」、「あなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら…」という注意点がありません。つまり、言い換えるなら「よく考えもしないで…、信じたつもりになってしまうことが有り得る」ということではないでしょうか？そして、当然、よく理解しないまま信じたつもりになっているなら、そこに救いはありません。本当の信仰はそこにはないからです。**

これは、以前、皆さんにお話したことですが、エペソ4:18をご覧ください。「**彼らは、その知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、かたくなな心とのゆえに、神のいのちから遠く離れています。**」、つまり、救いには遠い、救われていないとあるのですが、パウロはここで、ある人たちが救われない理由について説明をしてくれています。それは、一つ目は「知性＝無知」であり、二つ目は「かたくなな心」です。実は、ここでパウロははっきりと教えているのです。「人が救われないのは神がその人を救ってくださらないからではない！その人が、救いを拒んでいるからだ！」ということ…。「かたくなな心」、これはすぐに分かります。その人自身が聞こうとしない、受け入れようとしない、ということです。つまり、それがその人の選択だということです。しかし、「知性＝無知」に関してはどうでしょう？「知識に関してはどうしようもない。なぜなら、その人は知らなかったのだから…。努力でどうなるものでもないし…」と、ある人はこのように言われるかもしれません。でも、ここで「無知」と訳されているギリシヤ語は「怠慢」とも訳せることばなのです。日本語でも、知識のな

い人のことを私たちはむやみに「無知である」とは言わないはずで、そこには、ある種の軽蔑というか、あざけりの意味があります。もしかすると、「それは、その人が最低限の努力さえ惜しまずにしているなら知ることができたのに、それをしなかったから、その知識がないのだ」というような意味が含まれているのです。なぜなら、少なくとも、みことばはこう教えているからです。「神は、明らかにご自分を示しておられる」と。それにも関わらず、人間の方が神に対して心を開こうとしないのです。このようなことは、先ほどの箇所だけでなく、ローマ1章などでも教えられています。

皆さん、この聖書の教え以外にしっかりと納得できる教えはありますか？申し訳ないですが、私は「信じなくても良いからこのことばを唱えればあなたは救われる…」などと言われても納得できませんでした。「悪い人間は地獄に行き、良い人間は天国に行ける」と言われても、どこにその根拠があるのでしょうか？その線引きはどこでされるのでしょうか？「亡くなったご先祖さまがお前を見て守っていてくださる」と言いながら、「お墓参りしないからご先祖さまが怒っておられる…」などと、なぜ、私を愛してくれているはずのご先祖さまや自分の両親が、そんなことで怒るのでしょうか？なぜ、私の近くにいるはずの両親が、私が以前よりも増して感謝しているということをつかってくれないのでしょうか？逆に、聖書が教えるように「聖い神さまから見たときに、あなたはとんでもない罪人で、さばかれるべき存在である！」と言われた方が納得できました。もちろん、さばかたくはありません。でも、納得できませんか？また、救いに関しても、罰が必要だ！罪の清算が必要だと言われ、その罰をイエス・キリストが私たちの身代わりとなって受けてくださって、十字架で死んでくださった…、しっかりと罪の清算がなされています。また、イエスはその罪の罰である死に対して打ち勝たれ、死よりよみがえって来られた、イエスは罪の罰である死に対して勝利されただけでなく、罪に対しても勝利されたお方だと、みことばは教えます。非常に論理的です。聖書66巻、1600年間かけて書かれた聖書には矛盾がないどころか、逆に、これだけの分厚さがあっても、なお、完璧な教えを保っているのです。これは驚くべきことです。今の時代、コンピュータなどを使っても、同じ作者が小説などを書き続けて行くと、論理的な矛盾点が出て来るのです。しかし、聖書は1600年にも渡る40人以上の作者がいるにも関わらず、そのような矛盾点の一つもないのです。この聖書は、神が私たち人間に書き送ってくださった唯一の書物です。だれであっても、もし、神の前に謙虚になって、真剣にみことばを学び、神のみことばに耳を傾けられるなら、必ず、その人は救われると私は思います。多くの方が神の存在を認め、自分の罪を認めます。それなら、この聖書が教える神以外に、あなたの罪を完全に清算された方はいないのではないのでしょうか？確かに、これまで素晴らしい教えを説いた人は数多くいるでしょう。私など及びもつかないほど、知恵があり教養ある人、知性の優れた人がいます。人に優しくし、多くの方の幸せのために自分を犠牲にして、この社会に貢献した方もたくさんいます。苦しい修行を積まれた方もいます。しかし、私たちが愛して、その罪を赦すために自分のいのちを犠牲にして、その罪の罰をその身に受けてくださったお方、また、その死から敢然とよみがえられたお方は、果たして、このイエス・キリスト以外にいらっしゃるのでしょうか？

3. あなたは自分の罪を捨てなければならない 13-14節

イエスの教えてくださった救いの方法…、その最後のポイントを見て行きましょう。それは、あなたが自分の罪を捨てなければならないということです。確かに、聖書は「あなたが罪をなくして良い人間になったら救ってあげよう」とは教えていません。そんなことは到底無理だからです。しかし、聖書は同時に、「何でも良いから、まあ信じなさい！あなたの生活や生き方はどうでも良いから、とにかく信じなさい。地獄に行きたくないなら信じなさい！」というように安易には教えていません。

「:13 狭い門からは入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこからはいつて行く者が多いのです。:14 いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。」、この14節のみことばを原文で注意深く観察してみると、14節の冒頭に「何と、いかに」などと訳すべき感嘆符が書かれてあります。つまり、イエスはここで「なんと門は狭く、道は窮屈なのでしょう！」と言われているのです。多くの方がはいつて行く滅びに至る道に比べ、本当の救いに至る門は余りにも狭く、その道は窮屈なのです。この「救いに至る小さな門」のことを教えている聖書の箇所がありますから、ご覧ください。マタイ19：16-22です。ある青年が「永遠のいのちを得るため」の方法についてイエスに尋ねている箇所です。そこで、このような話がなされたのです。**「:16 すると、ひとりの人がイエスのもとに来て言った。「先生。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか。」:17 イエスは彼に言われた。「なぜ、良いことについて、わたしに尋ねるのですか。良い方は、ひとりだけです。もし、いのちには入りたいと思うなら、戒めを守りなさい。」:18 彼は「どの戒めですか。」と言った。そこで、イエスは言われた。「殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証をしてはならない。:19 父と母を敬え。あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」:20 この青**

年はイエスに言った。「そのようなことはみな、守っております。何がまだ欠けているのでしょうか。」：21 イエスは、彼に言われた。「もし、あなたが完全になりたいなら、帰って、あなたの持ち物を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」：22 ところが、青年はこのことばを聞くと、悲しんで去って行った。この人は多くの財産を持っていたからである。」、皆さん、聖書は決して「あなたが全財産を処分して貧しい人に施すことがなければ救われない！」と教えているわけではありません。もし、そうなら、聖書に出てくるすべてのクリスチャンたちは同じことをしなければ救われなかったはずです。ここでイエスは「あなたは、神と富とそのどちらを優先するのか？」ということをお問われているのです。しかし、残念ながら、この青年は神よりも富を優先する方を選び、その場を去ってしまったのです。

また、マタイ 18：3でも「…まことに、あなたがたに告げます。あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、はいれません。」とあるように、神に対する完全な依存をもって、自分を低くして、しっかりと自分の罪を悔い改める者こそが天の御国にはいれるのです。ですから、使徒 3：19でも「そういうわけですから、あなたがたの罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて、神に立ち返りなさい。」とあるのです。皆さん、私たちが救われるために必要なことは、罪の悔い改めです。「とにかく、何が何でもイエスを救い主と信じたなら救われる…」などと聖書は教えてはいません。自分が間違っていたことを神の前に謙虚に認めて、神を自分の唯一の主人とすることなのです。確かに、このようなことは難しいことです。だから、弟子たちもそのことをイエスに尋ねました。もう一度、最後に、マタイ 19：23-26をご覧ください。「：23 それから、イエスは弟子たちに言われた。『まことに、あなたがたに告げます。金持ちが天の御国にはいるのはむずかしいことです。：24 まことに、あなたがたにもう一度、告げます。金持ちが神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。』：25 弟子たちは、これを聞くと、たいへん驚いて言った。『それでは、だれが救われることができるのでしょうか。』：26 イエスは彼らをじっと見て言われた。『それは人にはできないことです。しかし、神にはどんなことでもできます。』」。

確かに、救いに至る道にはいるのは難しいことかもしれません。しかし、救いは神のみわざです。もし、皆さんが神を主人として従って行こうとされるなら、必ず、神はあなたとともにいて、力を、助けを与えてくださいます。もし、あなたが本当に、心から真理を求めて、「救われたい！」と願うなら、間違いなく、あなたは救われます。それは、私たち人間には難しいこと、いえ、できないことです。しかし、神だから、それがおできになるのです。あなたの頑なな心を神は一瞬の内に変えることができます。しかし、神があなたの心を変えられるその時、あなたはご自分の罪を悔い改めているはずですが、また、この神だけが唯一であり、この教えだけが天国につながる唯一の道であることを確信しているはずですが、そして、あなたはその選択を、今、自分がしっかりとしていることを自覚させられるのです。

どうぞ、神からの最高のプレゼントである救いを、あなたの永遠を変えるこの救いをしっかりとご自分のものとしてください。